

## 疑いすぎは夜がづらい

で、認知症の一種だ。確かに、その初期には「レム睡眠時行動障害」と呼ばれる症状がみられることがある。

大抵は悪夢をみてうなされ、大きな寝言や叫び声をあげたりする。夢の中の相手と格闘し、壁を殴ったり蹴ったりする。横で寝ている家族が被害にあうこともある。だが、Kさんの場合は、コワイ夢はみるのだが、暴力的な異常行動はないようだ。

DLBでは多くの場合、その初期から、実際にはないものが見える「幻

視」が現れる。筋肉が硬くなると、動作が緩慢になる。小股で歩くようになったりする。頭がボーとするときもあるが、記憶障害は目立たない。

認知症で亡くなったひとの脳を調べると、DLBが12〜40%を占めるという統計もある。後期高齢者が多くなる時代に、これから増えていく病気である。だから、「悪夢だけでは」と、バカにしてはいけな

う。が、逆に、悪夢をみるだけでDLBを疑うとなると、Kさんのように、毎日、夜を迎えるのがづらくなる。



## 悪夢見て異常行動

（石黒修三||いしぐろクリニック・脳神経外科専門医、金沢市在住）

一般に、歳を取ると睡眠が浅くなり、夜中に何度も目を覚ます。その目を覚ます前のレム睡眠期には、誰だって夢をみる。悪夢だってみる。Kさんは、夢をみたことがなかったというが、みたことを忘れていたのだ。楽しい夢もたくさんみているはずだが、悪夢ほどには覚えていないようである。

「知らぬが仏」とあざけてはいけない。ひとは知ることので辛い思いをすることだってある。

75歳のKさん。軽いもの忘れて通院中の「軽度認知障害」の患者さんだ。「センセ。わたし、本当は、レ

ビー小体型認知症(DLB)では？」と、憂鬱そつだ。夢などみたことがないのに、この頃はやたらコワイ夢をみるという。

DLBは、約20年前から広く知られるようになった比較的新しい病気

レビー小体型認知症